地域と学校　その3

RC造校舎への建て替え

小松 尚（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

7月初めのある日に石榑（いしぐれ）小学校を訪れると、畳の間で2年生45名が神妙な顔つきでお茶を飲んでいました。授業で朝の1時間目から学校の茶畑で茶摘みをして、それを煎っての試飲会です。新茶の薫りに鼻をくすぐられて、私も一杯ご馳走になりました。その後に給食を一緒に食べながら話を聞いたら、子どもたちの感想は一様に「苦かった!」。でも私には、苦さとほんのりとした甘さがとけ合った格別の味でした。

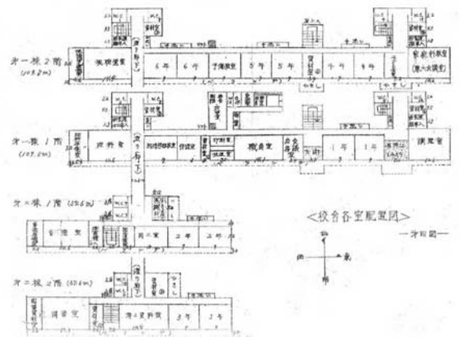
さて先回に引き続き、今回は昭和50年の鉄筋コンクリート校舎への建て替えの顛末をお話しします。

建て替えの要望書

戦時下における皇国民の錬成機関として、全国の尋常小学校は昭和16（1941）年に国民学校と名前を変えました。しかし終戦を迎え、昭和22年からは6・3制の新学制が始まり、石榑国民学校も石榑村立石榑小学校として再出発しました。校舎については大きな変化はなく、木造校舎の時代が続きましたが、昭和40年代後半になって、築後約70年が経過して老朽化した木造校舎を建て替える話が持ち上がってきました。

ここに『校舎建築に関する要望』と題する冊子があります。これは、木造校舎の建て替えに向けて学校がとりまとめた要望書です。前書きには、「最も重視した点は、子どもたちが活動しやすく、教師が使いやすいという点で、毎日数百人の児童、教師がこの中で学習し、生活することを常に念頭において考えた」とあります。また、「もちろん、私たちには建築についての専門的知識がないので、建築学の基礎を無視している内容もあろうし…」と書かれていますが、24頁にわたる冊子には日々の学習や生活に関する要望が寸法入りの図面で具体的に列挙されています。立派な仕様要望書です。

表紙には、この冊子の発行者が石榑小学校であると記され、内容的には学校での教育や学習に関する空間的な要望が中心になっています。しかし、この建て替え計画にも地域の方々の目に見えない尽力がありました。そこで、当時、RC造校舎への建て替えのために育友会（PTA）会長として奔走したHkさんにお話をうかがいました。



『校舎建築に関する要望』で提示された平面計画

実現できなかった地域利用ゾーン構想

Hkさんは、息子さんが4年生になった昭和49年に育友会会長に就任しました。ちょうどその頃、校舎建て替えの気運が高まっていたのですが、学校や育友会にはそれ以上構想を具体化する力がないと判断し、Hkさんは自分もその一員である学窓会（同窓会）を立て直すことから始めました。学窓会を盛り立てることで地域の名士の支援を取り付け、町長はじめ行政に対して要望が届くような体制をつくったわけです。

また、『校舎建築に関する要望』は6回練り直され、当時の町長の下へ届けられました。木造校舎が敷地南側にあり、北側が校庭であったことから、校庭に校舎を建て南側を校庭とする、ちょうど校舎と校庭を逆転させる案でした。校舎は2階建ての2棟からなり、1階に1年生と2年生の教室と職員室や特別教室、2階には3年生以上の教室が配置されています。

Hkさんによると、RC造校舎の計画にあたっては地域住民が利用できるゾーンをつくるという構想がありました。確かに、『校舎建築に関する要望』に折り込まれた図面の部屋名をよくみていくと、南棟の2階に図書室とは別に郷土資料館という部屋があり、104㎡が与えられています。階段横の便利な位置にあることから、地域住民の来訪や利用も想定されていたと思われます。

しかし実際には実現しませんでした。学校建設は補助金事業であることや文部省（当時）の小学校の規定に合致しないこと、町にもそれだけの追加資金が無かったためです。当時の町長から、学校の教育や子どもたちに関する点については要望書にあるように実現させるので、校舎は2階建て2棟ではなく3階建て一棟にしてほしい、地域ゾーンは我慢してほしいと言われ、Hkさんは泣く泣く引き下がったそうです。

昭和50年に完成した鉄筋コンクリート校舎（石榑小学校提供）

唯一購入された校門の石（石榑小学校提供）

地元の人々による造園工事（石榑小学校提供）

工事の段階になっても苦労は多かったそうです。同時期に行われていた別の小学校の建て替え工事で談合があり、それを知った町長が石榑小学校の建て替えは止めると言いだし、その火消しにHkさんらが奔走することがありました。また木造の講堂の処遇も懸案でした。当初は引き屋をして使い続ける計画でしたが、地域からは、ボロボロの講堂を引き屋してどうする、新築してほしいという陳情をしました。引き屋の予算は2500万円でしたが、新築の見積もりは最低6500万円と出ました。4000万円不足するわけですが、Hkさんはこれを育友会の寄附で工面すると町長に伝えたり、農協に借金の下交渉までしました。まるで明治40年の木造校舎建設のようですが、さすがに時代が違います。さらには、今後、町内のいくつかの学校の体育館建設が控えていることもあって、同じ設計で建てていけば安く済むのではないか？といったやり取りまで町長にしたそうです。さすがに町長もその熱意に折れて、最終的には全て町費で工事は行われました。

地域住民がつくった校庭

こんな状況ですので、昭和50（1975）年に校舎と体育館は竣工しましたが、校庭整備の予算は残っていません。そこで、校庭整備は学総会を中心に寄附や無償労働によって行われました。購入したのは新しい学校の正門の左右に置かれた8万円の石だけ。それ以外は全て寄附の石でした。また、木造校舎の礎石なども大事に活かされました。写真の作業風景の中の人々は雇われた職人さんではなく、石榑の無償の石工さんたちです。ですので、誰がしたのか分かりませんが、夕方にはよく酒や肴の差し入れが置かれていったそうです。

植木も全て寄附でした。庭師さんが石榑中を歩き回って、1軒ずつお願いに行ったそうですが、おもしろい逸話もあります。ある時、あるお宅の門構えの松が無くなり、気がつくとそれが学校の校庭に植えられていました。黙って植え替えてしまったのですが、植え替えた庭師さんは「あんたの松は、学校に植えられて出世したのだから喜ばないといかん!」と言ったそうです（笑）。学校に植えられると出世するとは、うまく言ったものです。

これらの石や植木は、新校舎建設時の校庭整備の際にも大切に扱われました。石の一部は位置を変えましたが、今も校庭の隅にどっしりと構えています。子どもたちはそんな経緯があることは知るわけもなく、毎日休み時間には登って遊んでいます。

地域のため、子どものために尽力するDNA

さて、HkさんはこのRC造校舎建設だけでなく、それを建て替えた現在の校舎建設の建設委員会にも学窓会の代表として参加しました。Hkさんは2度の校舎建設に深く関わったわけですが、このような方はHkさんだけではありません。新校舎の建設委員会では、RC造校舎の建設当時の話がよく話題になりました。さらに驚くことに、Hkさんのおじいさんは明治40年の木造校舎建設にも関わっていたのでした。

石榑のDNAはこのように受け継がれ、その時々の校舎建設という大事業の中でよみがえってきたと言えるでしょう。地域とは人であり、人が地域をつくり、学校をつくっていることがよく分かります。

Hkさんは、平成17年11月にRC造校舎が取り壊される様子を何とも言えない気持ちで見ていたそうですが、その一方で新しい校舎では地域利用ゾーンとしての部屋や機能が確保されたことを、30年越しで実現できたと喜んでいます。

そのHkさんがこんなことをおっしゃっていました。子どもに目を向けて、子どもにとって学校がどうあったらいいかを一生懸命考え、行動すれば、自然と地域はつながっていくものじゃないか、と。

そんなお話をうかがった頃、学校や教師に不条理な要求をする親のことを「モンスターペアレント」と呼び、問題になっているというニュースを耳にするようになりました。そんなモンスターが出現する最近の状況を、Hkさんはどう見ていらっしゃるのでしょうか？

〈参考文献〉
石榑小学校『校舎建築に関する要望』昭和48年